秋田県の公式ウェブサイトによると、今年9月1日現在の県人口は101万652人。1981年には125万8千人いた人口（総務省統計局）はこの35年間で24万人減ったことになり、このままでは100万人の大台を割るのは時間の問題である。

全国一の高齢化が進む一方で、女性1人が生涯に産む子どもの推定人数を示す合計特殊出生率は1・38（2015年厚労省人口動態統計）と、こちらも過去10年間、全国31～41位の低水準で推移している。こうした少子高齢化の厳しい現実を同窓会員や現役生徒たちはどのような目で見ているのか、ふるさと秋田創生の観点から浮かび上がる喫緊の課題とは――。

必要な世界的視野 秋田の「価値」再発見を

土井 英司（平成5卒）

リオデジャネイロ五輪で日本が獲得したメダル数は、過去最多の41個となった。驚くことに、日本の過去の獲得メダル数のうち、秋田県は20個で大阪、東京、福岡に次いで4位となっている。種を明かせば、これは体操、レスリングなどの特定競技が強く、局所的にメダルを大量獲得しているためである。ここにグローバル時代の『ふるさと創生』のヒントがある。

著者は2015年1月から2016年2月までニューヨークに住み、また最近はパリやミラノなど、欧米の主要都市を訪問しているが、グローバル化の本質とは、「いいとこどり」であると断言できる。アメリカやフランス、イタリアの主要都市のスーパーマーケットに行くと、ヨーグルトはギリシャ、水はフランス、麺類はイタリア・日本と完全に「いいとこどり」されている。つまり、「ローカルにとっては当たり前の品質水準を維持した結果、グローバルで飛び抜けて品質が高い」商品が売れているのである。近年、ニューヨークやサンフランシスコではラーメンが大ブームだし、ニューヨークの大人気オーガニックスーパー、「Whole Foods Market」には、何種類もの豆腐と寿司が置かれている。

手前味噌ではあるが、プロデュースを担当した近藤麻理恵氏の『人生がときめく片づけの魔法』（英語版は“the life-changing magic of tidying up”）が、全米No・1ベストセラーに輝き、全世界で累計625万部を売り上げた。

これは、実用性もさることながら、日本特有の「モノに感謝する思想」や神道的世界観が受け入れられたためである。グローバル時代に『ふるさと創生』を実現するには、大きな市場に対して地元の優位性を売っていくことだ。そのためには、世界の主要都市の消費者の気持ちを知る必要がある。良いものがあるだけでは、ビジネスは完結しない。外から見た秋田の価値の再発見と、インターネットを使った情報発信（もちろん英語）に成功のカギがある。地元のますますの発展を期待したい。

どい・えいじ／1974年生まれ。慶応義塾大学総合政策学部卒業。日経ホーム出版社（現・日経BP社）を経てアマゾンの日本サイト立ち上げに参画。2004年エリエス・ブック・コンサルティングを設立、以来代表取締役。出版マーケティングコンサルタント。ビジネス書評家。東京都渋谷区在住。

住みたい街づくり 転勤族からの視点

宮田 一彦（昭和60卒）

秋高を卒業し生まれ育った地を離れ早30年。この間、7回の転勤を含め首都圏、仙台、福岡、関西、海外（香港）と10回以上転居、出張ベースで全47都道府県を訪れた。若者の定着策や雇用の創出等は専門家にお願いするしかないが、転勤族の目から見た秋田の課題として感じることを生意気承知で申し上げたい。

それは、住みたい街とはどんな街なのかを行政と住民が一緒に真剣に考えて実現してほしい、ということだ。

今夏帰省した際にがっかりしたことがある。実家の周辺道路一帯で何十年もかけて立派に育っていた街路樹群が、広範囲でほとんどが消滅していたのだ。親に聞くと、歩道の縁石工事に邪魔になるから伐採されたようだ、という認識だった。真夏でも木陰を作り歩行者やジョギングする人たちに優しかった木々は今や無く、ただ綺麗になったコンクリート製の縁石とアスファルトが太陽をギラギラと反射させているだけだった。

たかが街路樹、それよりも安全のための工事が大事と言ってしまえば元も子もないが、住民の憩いや街並みの印象を一変させてしまう結果をもたらす。もしこれが一時が万事、街づくりの細部に無神経な一面があるとするならば、いくら若者の定着や県外から人を呼び込む、などと謳っても空回りになるのではないか。

ネットには「住みたい街」とか「住んでよかった街」のランキングが載っている。私も転居する際に参考にした。ランク上位の街は行政と住民が一体になった地道な活動を行っていたり、条例で街の景観を守る規制をしていたり独自により良い街づくりを真剣に実行しているところが多い。

ここ数年帰省する度に感じるのは、他の地方都市同様、どこにでもある趣の無い街になっていく秋田の姿である。以前住んだつくば市は公園を中心に幼・小・中学校、公民館、交番等が配置され各公園同士は車やバイクの通れない遊歩道で結ばれていた。休日に木漏れ日が降り注ぐ遊歩道を家族でサイクリングする気持ちの良さはこれ以上はない憩いのひとときであった。

これらがそのまま秋田の参考になるかどうかは分からないが、例えば住民満足度日本一の街づくりを目指して達成できたら県外から移り住んでくる人も増えるのではないか。関係者の奮起を期待します

みやた・かずひこ／1966年秋田市生まれ。慶応義塾大学商学部卒業後、㈱クボタ入社。主に営業畑を歩み、国内農機販売会社企画部長、本社営業G長、海外子会社社長を経て現在は本社でアフターマーケット創出関連プロジェクトを担当。兵庫県西宮市在住。